

「 災害への心構え 」

石川県 金沢大学附属中学校 2年 荒木 結夢

近年、土砂災害のニュースを頻繁に目にするが、いざ身近で発生したときは速やかに安全な行動をとれるだろうか。私の父は消防職員で普段から災害についての会話は多く、私自身も小学生の時に防災センターで災害の疑似体験をしたり、対処法について学んだりした。しかし、令和6年能登半島地震で震度5強を経験した時は、恐怖で身動きがとれなかった。家族とたくさん話しかってきたはずなのに、避難訓練で災害について学んできたはずなのに、実際に起きた時には冷静になれなかった。「まさか自分の身近には起きないだろう。」こんな甘い考えが心のどこかにあったのだと思う。私が住んでいる地域は大きな被害はなかったが、もし土砂災害が発生したら命が危なかったかもしれない。実際にこの地震では北陸三県で300件以上の土砂災害が発生した。そして、中には亡くなられた方もいる。

土砂災害は地震だけではなく大雨や火山噴火によっても起こる。特に大雨による土砂災害は日本各地で起きている。令和4年から線状降水帯の予測が可能となり、顕著な大雨に関する気象情報が発表されるようになった。昨年7月、石川県や富山県を中心に線状降水帯が発生した。富山県内では大雨により土砂災害が発生し、死者も出てしまった。線状降水帯や南海トラフ地震のような巨大地震が懸念される今、普段から気象庁や自治体が発信する情報を頻繁にチェックしなければならない。自分の勝手な根拠のない解釈は捨て、警戒心や危機感をもって行動することが大切だと痛感している。

「大雨だったけれど災害が起こらなくて良かったね。」と言えるのは命あってこそだ。

父は仕事上、災害が起きるといふ一番に消防署にかけつけなくてはならない。令和6年能登半島地震の時も発災から10分以内に家を出て消防署に向かった。被災地の珠洲にも緊急消防援助隊として派遣された。父から現地の様子を聞いた時は衝撃を受けた。家族が心配であっても、地域を守るために仕事に向かう父を安心させるためにも、命を守る活動を最優先にしていきたいと思う。

自分自身が災害を経験し、今一度家族と話し合った。その際、小学生のときに学んだ災害時は自助、共助、公助が大切だということを思い出した。そこで、自分自身に何ができるのか、私にできる自助と共助について考えた。

まず、自助はすでに自治体が作成しているハザードマップをもとに、自分の目と足で知るためにまち歩きをして、より詳しい自分なりのオリジナルマップを作る。それをもとに災害が発生したときの避難所までの避難シミュレーションをする。また、土砂災害はどういったときに起きやすいのか、その危険性などを含め、改めて災害の知識を身につける。さらに、防災バッグや備蓄品を見直し、気象庁や自治体の情報にアンテナを張り、迷ったらためらわず避難することを意識する。これらのことが自助に繋がると思う。

次に、共助として高齢者施設、障がい者施設、こども園などを利用している避難に時間を要する人が多い場所を把握しておくことも大切だと考える。土砂災害は台風の多い夏に発生しやすいため、近年の異常気象から避難所では熱中症リスクが高まる。そこで、地域の方と協力して避難所のグリーンカーテン化を進め、避難所の環境を整え、少しでも被災者のストレスを軽減させることが重要だと考える。また、地域の方と共同作業することで避難所の把握にも繋がる。

私達個人でできることは少ないかもしれないが、いつ起きてもおかしくない災害に対応するために自助と共助の輪を広め、防災、減災に繋げていきたい。そして、冷静に安全に命を守る行動をとりたい。